

2023年4月30日（日）主日朝礼拝説教

『何も取れないときも』井上隆晶牧師

詩編 126 : 1～6、ヨハネ 21 : 1～14

### ①【ヨハネ 21 章が追加された理由＝迫害中の教会へ】

ヨハネ福音書は 20 章で終わっており、最後に「本書の目的」が書かれています。そこで 21 章は追加された部分だということが分かります。追加されるには何か理由があるはずですが、物語を読んでみましょう。弟子たちはエルサレムから故郷のガリラヤへ帰ってきました。イエス様が「ガリラヤで会う」と言われたからでしょう。ペトロが「私は漁に行く」というと、他の六人の弟子たちも「私たちも一緒に行こう」と言って、舟に乗り込みました。しかしその夜は何も捕れませんでした。何も捕れない漁には、象徴的な意味があります。かつてペトロは、このガリラヤ湖で何も捕れない漁を経験し、イエス様の言葉に従って大漁の奇跡を体験した後、「私について来なさい。人間を取る漁師にしよう」（マルコ 1 : 18）といわれ弟子となりました。ですから「何も捕れない漁」とは、信じる人が起こされない当時の教会を象徴しています。つまり 21 章が追加された目的は一世紀末の迫害の中にある教会を励ます為でした。夜が明けたころ、イエス様は岸に立っていました。弟子たちはイエス様だとは分かりません。イエス様は彼らに声をかけます。「子たちよ、何か食べるものはあるか。」弟子たちは答えます。「ありません」イエス様はいいます。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすれば取れるはずだ。」（5～6 節）そこで網を打ってみると、魚があまりにも多くて、網を引き揚げることができないほどでした。網を陸に引き上げると 153 匹もの大きな魚でいっぱいでした。4 世紀のヒエロニムスは、これは地中海の全ての魚の種類であり、あらゆる人が救われるという意味だと解釈しました。それほど魚が取れたのに「網が破れなかった」のは、どんな人でも受け入れ、何があっても破れない教会を意味しています。またある学者は「舟の右側とは異邦人を意味する」とも解釈しました。

### ②【キリストと対話をしなさい＝聖なる生活の大切さ】

興味深いのは、弟子たちがイエス様と対話を始めたことから物語が大きく展開したということです。私たちもイエス様を見えませんが、聖書や礼拝を通してイエス様と対話をすることが出来ます。私たちは、どんな時も聖書を読み、祈り、礼拝をするという「聖なる生活」を抜きにして何も始まらないのだ、ということを知るべきです。「聖なる生活」は神との交わりの生活です。私たちは人生の中に神を入れなければならず、キリストという土台の上に人生を築かなければなりません。先日、理由があって教会から遠く離れている人からメールが来て「礼拝に行かなくなると、不思議と平気になってしまう」と言われました。しかしどんな人でも再び聖なる生活に戻るならば、神様はその人の霊を回復させられます。宗教改

革というのはルターにしても、ウエスレーにしても、カトリックの第二バチカン公会議にしても、聖なる生活という基本に帰る運動でした。では、聖書を読み、祈っていたらそれだけでいいかということそれだけでは駄目です。舟の弟子たちはイエス様のいう通りに従ったら大漁になりました。聖書を読んだら、今度は従うという行動が必要です。イエス様も「わたしのこれらの言葉を聞くだけで行わない者は皆、砂の上に家を建てた愚かな人に似ている。」(マタイ 7:26) と言われ、み言葉を行うことを命じられました。

●榎本保郎牧師はこう言っています。「結局、私たちの人生が、神の指揮棒によって操られてゆくという人生が、本当のクリスチャンの人生だと思う。何かこうクリスチャンと言えば、自分が愛の業をしたとか、こんな素晴らしいことをしたとか、その人の行為というものが非常に尊ばれやすいが、そうではなく、この人がいかに神の指揮棒に従って生きたかということが、クリスチャンの評価の基準である。…人間的に言えばイエスの伝道は失敗であった。…しかしこれが神の御心だと信じたから、あえて十字架の道を歩まれたのである。それが失敗したとかどうかということが問題ではなく、神の指揮棒に従って生きたかどうか問題なのである。」

神の指揮棒に操られる者でありたいと思います。

### ③【主を知るために伝道も信仰生活もある】

弟子たちが「陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。」(9 節) とあります。既に陸にはパンも焼いた魚も用意してありました。では何のために苦勞して漁をさせたのでしょうか。つまり私たちは何のために伝道をするのでしょうか。それは信徒を増やす為や教会を大きくする為ではありません。答えは「主を知るため」です。旧約聖書の中に繰り返し出てくる言葉に「～をして栄光を現わす時、あなたがたは私が主であることを知るようになる。」とあります。ここでも誰も「あなたはどなたですか」と問うことなく、「主であることを知っていたからである」(12 節) とあります。「主を知る」ために、すべての地上での信仰生活があるのです。振り返ってみればキリストがすべてを用意して下さっていたのであり、私たちはキリストを離れて何も出来ないのであり、キリストはこの世界を支配しておられ、本当に生きて働いておられるということを知るためなのです。

### ④【イエス様との天国の食事】

イエス様は「さあ、来て、朝の食事をしなさい」(12 節) と言われます。「イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。」(21:13) とあります。この岸边での食事は、天国での食事を感じさせます。面白いことに、聖書は善悪知識の木の実を食べる墮落物語で始まり、イエス様の手からいただくパンを食べる物語で終わっています。弟子たちはイエス様を裏切りましたが、そんな彼らに対してイエス様の態度は何も変わりませんでした。以前と同じように食事をします。考えてみるといつもイエス様と弟子たちは一緒に食べているので

す。食べながら大切なことを語ります。それは人が神と共に生きる姿なのです。人はキリストの手から永遠の命をいただいて、キリストに生かされるのです。

●教会は天の国という氷山の一角、または天の国の岸边です。なぜ岸边なのか？それは天ともつながり、この世という海ともつながっているからです。都島教会はその最も小さい部分にしか過ぎません。都島教会の後ろには、永遠につながる教会（神の国）が存在しています。時間を超え、空間を超え、場所を超えた教会が、今この世の中に、天国の窓として出張しているのです。この教会はどこよりも小さく、この世の人は目もくれません。小さな門であり、狭い道です。この世は強大であり、建物は立派で大きく、永遠に残るように人々は思っていますが、時が来たならばすべての飾りは剥がれ落ち、この世のものはみな崩れ去るでしょう。そしてそこに隠れていた巨大な神の国が現れるのです。そして人々は知ります。この誰もが見向きもしなかったちっぽけな都島教会が、永遠に続く神の王国、世々の聖徒たちの国であった、ということ。どんなに小さかろうと、教会はキリストの聖なる神秘体です。そこに聖霊は充満し、キリストはそこに現れ、人と交わり、神の命を与えます。その昔、モーセは自分が立っている場所が、神がおられる場所であることを知りませんでした。どこにでもある荒れ果てた場所だと思っていました。しかし神はモーセに言われました。「**足から履物を脱ぎなさい。あなたが立っている場所は聖なる土地だから。**」（出エジプト3：5）同じ事が、世の終わりにも再現されるでしょう。この都島教会はキリストの聖なる体、主の足台です。その時、人々は言うでしょう。「ああ、なぜもっとこの場所に頻繁に足を運ばなかったのだろう。ああ、なぜもっとこの場所で永遠の言葉を聞けなかったのだろう。ああ、なぜ私は永遠に残るものの為に生命と時間を遣わなかったのだろう。」

讚美歌 21 の 158 番の 4 番の歌詞にこう書かれていました。「涙と共に種まく人、ゆたかに実る、刈り入れの日に、よろこびの歌、さずけられる」今は涙を流しながらでよいから説教し、語り続けよ。いつの日か、豊かな実りを刈り取ることになると言われてるように感じます。この教会に来て 33 年になります。私は今まで何をして来たのか、時々分からなくなる時があります。この世において多くの実りを見ることもありません。でも一つだけ確かなことがあるのです。私は今、天国の岸にすでに立っているということです。教会は既に 153 匹の岸边だということなのです。都島教会は、その内の一匹でもいいのです。大事なことは復活したキリストと同じ岸にいます。復活したキリストと共に食事をしているということです。それが私に勇気を与えてくれます。この世の実りは主が決めておられることです。私たちは永遠の岸を見て、ひたすら神の国を伝えてゆきたいと思えます。